立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
プロジェクト研究（自由プロジェクト研究）
２０１２年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属･職名	氏　名
	異文化コミュニケーション学部／研究科・教授	武田　珂代子　　印
研究課題	翻訳「革命」期における翻訳者養成の新たなコンテンツと方法に関する学際的研究	
研究組織	所属大学名等・職名	氏　名
	立教大学異文化コミュニケーション学部／研究科教授	武田　珂代子
	立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科兼任講師	井口　耕二
	東京大学大学院教育学研究科教授	影浦　峡
	麗沢大学、神戸女学院大学、青山学院大学兼任講師	山田　優
	ダブリン･シティ大学応用言語異文化間研究科上級講師	オヘイガン統子
	モントレー国際大学翻訳通訳言語教育大学院助教授	ラッセル秀子
	立教大学異文化コミュニケーション研究科博士前期課程（2012年３月卒業）	関根　康弘
研究期間	2012　年度　～　2013　年度	

研究経費	2012　年度	2013　年度	総計
	3,000 千円	3,000 千円	6,000 千円

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

グローバル化、多言語多文化共生社会、インターネット上情報の爆発的増加を背景に、異言語・異文化間コミュニケーションの仲介者としての翻訳者の役割は益々重要になっている。その中で、機械翻訳、翻訳支援ツールの進展、ボランティアによるオンライン翻訳の普及、翻訳産業構造のグローバル化などを背景に、翻訳者をとりまく状況に「革命」が現在進行中だという指摘がある。本研究の目的は、現在の翻訳「革命」期そして今後求められる翻訳者コンピタンス（能力）を見極め、それを基にした翻訳者養成のコンテンツと方法をデリバリー手段（媒体）も含めて学際的に産学協同で検討し、翻訳教育の新たな方向性に貢献することである。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　翻訳者養成　〕〔　翻訳者コンピタンス　〕〔　翻訳環境の変化　〕

研究【経過・成果】の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

1. 研究者の役割分担：2012年度における各研究者が果たした役割は以下の通りである。

武田：本研究全体の管理、翻訳者養成の構成要素について教育者・研究者として知見を共有。シンポジウムの責任者・発表者・パネラー。「報告書」の執筆・編集。

井口：翻訳実務者・教育者、翻訳団体理事としての知見を共有。シンポジウムにパネラーとして参加。

影浦：本研究の方向性に関する示唆、ボランティア翻訳用プラットフォームの翻訳者養成への応用に関する知見を共有。シンポジウムに発表者・パネラーとして参加。

山田：翻訳実務者・教育者・研究者として、特に翻訳メモリーや翻訳業界の動向について知見を共有。シンポジウムに発表者・パネラーとして参加。

オヘイガン：翻訳テクノロジー研究者・教育者として、テクノロジーと翻訳者養成に関する包括的視点と世界的動向の情報を提供。シンポジウムにはペーパーで参加。

ラッセル：翻訳実務者・教育者として、特に米国の翻訳専門職大学院について知見を共有。シンポジウムに発表者・パネラーとして参加。

関根：翻訳プロジェクト管理者、システムエンジニアとして、また翻訳メモリー研究者としての知見を共有。シンポジウムにパネラーとして参加。

2. 研究会の実施

2012年7月から2013年2月にかけて立教大学で研究会を5回実施した。ほとんどの場合、立教とカリフォルニアおよびダブリンをスカイプで結び、議論を進めた。

第1回研究会（2012年7月19日）：翻訳と翻訳者をとりまく環境の現状をテーマに山田が研究発表（特に翻訳テクノロジーやクラウドソーシングに関するもの）を行い、議論した。

第2回研究会(2012年11月29日)： 翻訳「革命」期に求められる翻訳者コンピタンスの同定とその涵養法について、武田の研究発表、ラッセルの事例報告をもとに議論した。まずは日本における大学院レベルでの翻訳者養成を推進すべきではないかという結論に達した。

第3回研究会(2013年1月10日)：公開シンポジウムの準備を兼ねた研究会。発表者の発表内容などを確認し、議論した。

第4回研究会(2013年1月21日)：シンポジウム中に浮かび上がった課題を中　心に、これまでの　研究を振り返り、今後の研究の方向性を検討した。

第5回研究会（2013年2月5日）：シンポジウムおよび第４回研究会での総括の記録を確認し、さらに議論を重ねて、報告書の編集を行った。

加えて、上記研究会に付随する形で東京大学の影浦研究室の学生と立教大学で武田が指導する学生および卒業生が共同勉強会を2012年7月と11月に計2回実施し、翻訳メモリー、機械翻訳のプリエディティングなどに関する研究発表と議論を行なった。

研究【経過・成果】の概要　つづき

3．公開シンポジム「翻訳『革命』期における翻訳者養成」の開催

本研究の成果発表および問題提起を行い、一般参加者にも開かれたディスカッションを展開し、今後の研究課題を見極める目的で、2013年1月12日に立教大学で「翻訳『革命』期における翻訳者養成」と題する公開シンポジウムを開催した。パネルは武田、井口、影浦、ラッセル、山田、関根で構成し、オヘイガンはコメントペーパーを通して参加した。一般の参加者数は100名を超え、首都圏だけでなく東北や関西から翻訳者、学生、研究者、教員が集った。午前の部は「翻訳者をとりまく環境」と題し、山田の基調発表をもとに、パネルが自由にディスカッションするとともに、会場からの質問やコメントに応えた。午後の部は「翻訳者コンピタンスと翻訳者養成」と題し、武田が基調発表、ラッセルと影浦が事例報告を行い、パネルが会場からの質問やコメントに応えながらディスカッションを展開した。

4．『翻訳「革命」期における翻訳者養成：公開シンポジウムの報告と今後の取り組み』の刊行

上記公開シンポジウムの記録と本研究のこれまでの総括を報告する目的で、『翻訳「革命」期における翻訳者養成：公開シンポジウムの報告と今後の取り組み』（84ページ）を2013年3月に500部刊行し、立教学内および国内外の翻訳関係研究機関および研究者に配布した。内容は、シンポジウム当日の発表、ディスカッションに訂正や新情報を加えたものと、シンポジムおよびこれまでの研究の総括と今後の課題の見極めをまとめたものである。さらに、シンポジウムの内容に直接関係する参考文献のリスト、および翻訳、翻訳研究、翻訳教育に関する各種情報リンクのリストなども掲載した。

5．学会での口答発表、論文など(次ページを参照)

6．翻訳会社・翻訳者団体の会議への参加

2012年11月28日、日本翻訳者連盟主催の「第22回翻訳祭」に参加し、翻訳支援ツール、翻訳業界の動向、翻訳者の作業動向などについて情報を入手した。

7．オーストラリアおよび台湾における翻訳大学院プログラムの聞き取り調査

「大学院レベルでの翻訳者養成を推進すべき」という本研究の暫定的結論に基づき、2013年3月、武田がオーストラリアにおける日本語関連の翻訳大学院プログラム（クィーンズランド大学、マッコーリー大学、ニューサウスウエールズ大学）を、武田と山田が台湾における翻訳大学院プログラム（国立台湾大学、国立台湾師範大学、輔仁大学、文藻外語学院）を訪問し、授業見学、担当教員との意見交換を行った。

8．本研究に基づく新科目の提案

本研究に関連し、翻訳関係の新科目を3件提案し、2013年度開講されることになった。

「翻訳・通訳と現代社会」担当：武田、山田その他。（全カリ）

「通訳翻訳教育論」担当：武田（異文化コミュニケーション研究科）

「翻訳テクノロジー論」担当：オヘイガン（異文化コミュニケーション研究科）

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）

O'Hagan, M. (2012). Entertainment and Translation, *Translation Spaces*, 1.1, 123-141.

武田珂代子・ラッセル秀子 (2012) 修士論文としての翻訳：その意義と方法『翻訳研究への招待』第８号: 23-28.

②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）

Kageura, K. (2012). *The Quantitative Analysis of the Dynamics and Structure of Terminologies*. Amsterdam: John Benjamins. (243pp).

O'Hagan, M. (2013). The Impact of New Technologies on Translation Studies: A technological turn? In Millan-Varela, C. & Bartrina, F. (eds.), *Routledge Handbook of Translation Studies*. London: Routledge. pp. 521-536

O'Hagan, M. (2012). From Fan Translation to Crowdsourcing: Consequences of Web 2.0 User Empowerment in Audiovisual Translation. In Remael, A., Carroll, M. & Orero, P. (eds.), *Media for All 3: The Audiovisual Turn*. Amsterdam/New York: Rodopi. pp. 25-41.

③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）

シンポジム「翻訳『革命』期における翻訳者養成」、2012 年 1 月 12 日、立教大学

④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

Babych, B., Hartley, A., Kageura, K., Thomas, M., & Utiyama, M.(2012). "MNH-TT: a collaborative platform for translator training," Translating and the Computer. November 29-30, 2012. London.

Babych,B., Hartley, A., Kageura, K., Thomas, M. & Utiyama, M. (2012)."Scaffolding, capturing, preserving interactions in collaborative translation," 2012 LTTC International Conference: The Making of a Translator. April 28-29, 2012.Taipei.

土方奈美・武田珂代子 (2012)「修士論文としての翻訳：その意義と理論的分析の実例」通訳翻訳学会第13回年次大会(2012年9月8日)、京都橘大学

Kageura, K. & Murayama, R. (2012). "QRpac: user-driven archiving of parallel and comparable documents from the web," The 14th International Conference on Asia-Pacific Digital Libraries. November 12-15 2012.Taipei.

関根康弘 (2012)「法令用翻訳メモリデータベースシステムの開発：メモリの拡充と対訳辞書の組み込み」立教・異文化コミュニケーション学会第９回大会ポスター発表 (2012 年６月９日) 於・立教大学

Sekine, Y. & Toyama, K. (2012). "Development of Translation Memory Database System for Law Translation", Invited speech at International Symposium on Legal Information and Asian Law: Theories, Practice and Prototypes, June 15, 2012, The National Chung Cheng University of Taiwan.

Sekine, Y., Ogawa, Y., Toyama, K. & Matsuura, Y. (2012). "Development of Translation Memory Database System for Law Translation." 2012 Law via the Internet Conference, October, 9, 2012, Cornell Law School in Ithaca, NY.

武田珂代子・山田優 (2012)「翻訳『革命』期における翻訳者養成」通訳翻訳学会第 13 回年次大会(2012 年 9 月 8 日)、京都橘大学

武田珂代子編 (2013)『翻訳「革命」期における翻訳者養成：公開シンポジウムの報告と今後の取り組み』立教 SFR 翻訳研究プロジェクト（84 ページ）

山田優・立見みどり (2012)「機械翻訳を使った実務翻訳への朝鮮：日英翻訳におけるプリエディットとポストエディットの研究」通訳翻訳学会第 13 回年次大会(2012 年 9 月 8 日)、京都橘大学